

「信仰による決断」 創世記 13章

- I 信仰の回復。：1－4。アブラムは「自分自身」を回復した。そして妻のサライ、甥のロト、すべての所有物を回復した。ただ神の憐みで。しかし、彼は、ネゲブにとどまらなかった。彼にとって、ただ自分自身と家族、持ち物を回復するだけでは不十分、不徹底だった。彼は、神との関係、信仰を回復する必要があった。これなしに根本的解決はない。原点に立ち返る必要があった。彼はネゲブからベテルまで来た。そこは彼が「最初に築いた祭壇」があった場所。彼はそこで「主の御名によって祈った」：4。エジプト滞在中は、彼が祈った事は記されていないので、彼は久しぶりに祈り、信仰の原点に立ち返った。私達も、事ある毎に神に立ち返りたい。アブラムは、12：10－20のつらく、恥ずかしい経験を通して、自分の弱さ、罪深さを知らされたと思われる。それと同時にご自身のご計画を実行される神の熱心と神の深い憐れみを体験させられ、信仰の前進の時となった。私達の信仰生活、人生の旅路も同じである。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださる」（ローマ8：28）。
- II 別の問題が起こった。：5－7。 1. ロトは、アブラムへの主の祝福にあずかる事が出来、その結果、富む者となった。しかし彼は高慢になり、アブラム故に現在の自分がある事を忘れ、自分の力で自分の富を築き上げたかのように思い込んだようである。私達も気を付けたい。すべては、神のおかげであり、神が周りに置かれている人々の祈りや支えのおかげである事を忘れないようにしたい。 2. 問題の原因。「彼らの持ち物が多過ぎたので、彼らがいっしょに住むことができなかった。そのうえ、アブラムの家族の牧者たちとロトの家畜の牧者たちとの間に、争いが起こった」：6、7。牧草地が少なく、互いに権利を主張して争いが起こったのだろう。ロトの中に謙遜さが欠けていた事も原因だろう。ロトの心は、そのしもべである牧者たちにも影響を与える。
- III 信仰による決断。 1. 平和を愛するアブラム。彼は、牧者たちの間の争いが、やがて自分とロトとの争いになる事を見て取った。彼は平和を愛する者だったので、何とかこの争いを避けたいと考えた。 2. 謙遜と信仰。本来ならば9節の「全地はあなたの前にあるではないか。私から別れてくれないうか。もしあなたが左に行けば、私は右に行こう。もしあなたが右に行けば、私は左に行こう」の言葉は、年下の甥のロトのほうが語るべきものである。アブラムは、叔父であり年長者であり、アブラムの故にロトは豊かになった。しかし、神に立ち返ったアブラム（12：17の主の御介入がなければ、彼は、妻も持ち物もすべて奪われたかもしれない。神を第一とせず、自分の浅はかな計画によって動いた事を悔い改めた）は、自分の権利を捨ててロトに優先権を与えた。これはアブラムが謙遜にさせられたためであり、また、彼が自分の富に固執せず（富は、神が与えられた物、すべては神のものという自覚）、神のみこころを行う事を選び取ったから。「神の国とその義（神との正しい関係、神の御心に添う正しさ）とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのもの（真に必要なもの）はすべて与えられます」（マタイ6：33）。彼は、貪欲、欲張りな人間的な計算によるのではなく、信仰（神を信頼し、神の御心に生きる）によって行動した。「信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、…天幕生活をしました。彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です」（ヘブル11：9、10）。彼は地上の富の限界を知り、もっと確かな財産、つまり永遠の都を待ち望んでいた。

IV 人間的な目による貪欲な欲望による選択 1. 見えるところによる。「ロトが目を見てヨルダンの低地全体を見渡すと、主がソドムとゴモラを滅ぼされる以前であったので、その地は…主の園のように、またエジプトの地のように、どこも潤っていた。それで、ロトはヨルダンの低地全体を選び取り、その後、東のほうに移動した。こうして彼らは互いに別れた」：10-11。ロトは神に祈り尋ねることをしない。彼の目と心は、物質的な欲望に支配されていた。私達は、どうだろうか。私達がロトなら、アブラムの言葉にどう反応しただろうか。遠慮するか？神に御心を求めて祈るか？欲に目がくらみ即決するか？次の御言葉にしっかり耳を傾けたい。「すべての世にあるもの、すなわち肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます」（Iヨハネ2：16, 17）。2. 高慢、礼儀に反する心。ロトは、神への信仰、謙遜さ、礼儀に欠けていた。彼は、叔父であり、年長者であり、大変お世話になって来たアブラムの提案に対して遠慮することなく、自分の欲望、利益を中心に行動した。今一度、自分に聞きたい。「私ならどうしたでしょうか」。聖書には、私達が生きる上での宝の指針がある。愛は「礼儀に反することをせず」（Iコリ13：5）。「主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい」（エペソ5：10）。「この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、神のみこころは何か、すなわち何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい（原語：変えられ続けなさい。アブラムは、失敗しても神に立ち返り、変えられ続けた。私達もそうありたい）」（ローマ12：2）。

V 貪欲な選択の危険性。：12, 13。ロトが自分の欲の目で選んだ地「ソドムの人々はよこしまな者で、主に対しては非常な罪人であった」：13。物質的繁栄は、多くの場合、神への不信仰と道徳的な墮落をもたらす。私達の国もまた、かつて何回か目指して来たものを考え直す選択の機会が与えられた。しかし、神を恐れ敬い信頼する信仰の道よりも、目に見える繁栄の道を選び取って来たように思われる。私達一人一人にもいつも選択を迫られている。神の御心を求めず、世俗的な繁栄の道を選ぶか、それとも世の見方からすると損に見えても信仰によって主に喜ばれる道を選び取るかいずれかである。その選択の結果、刈取りは重大なものとなる。

VI 励まし。：14-18は大きな励ましである。「ロトがアブラムと別れて後、主はアブラムに仰せられた。「さあ、目を見上げて、あなたがいる所から北と南、東と西を見渡しなさい。わたしは、あなたが見渡しているこの地全部を、永久にあなたとあなたの子孫とに与える」：14, 15。この御言葉から励まされる事は、神は、アブラムが、神への信仰と謙遜をもって、ロトに選択権を譲った事、二人の選択のすべてを見ておられ、知っておられるという事。損をしたように見えるアブラムに対して、決してそうではない事を語られる。改めて約束と祝福を語られる→：14-17。神は、私達の事もすべて見ておられご存知。神を第一として御心を選択し歩む時、損のように見えても神は報い、真に必要なものを与えて下さる。マタイ6：33！